



ジェームズの感情理論 : 教科書にあらわれるその根拠と論理

宇津木, 成介

(Citation)

国際文化学研究 : 神戸大学国際文化学部紀要, 27:1-27

(Issue Date)

2007-02

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81000843>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000843>



ジェームズの感情理論： 教科書にあらわれるその根拠と論理

宇津木 成 介

心理学の教科書で「感情」あるいは「情動」という項目を開いてみると、かならずと言ってよいほどジェームズ・ランゲ説とキャノン・バード説が対比されている。その焦点はジェームズの「ひとは悲しいから泣くのではない、泣くから悲しいのである」という主張にある。この主張は「情緒の末梢起源説」と呼ばれることが多いが、この一見すると明らかに説得力のない主張は、実は正鵠を得たものとして、現在でも多くの心理学者によって支持されている。しかしジェームズが何を根拠としてこのような主張をしたのかについて、説明がなされた例は皆無と言ってよい。本稿では、ジェームズのこの主張の根拠を探求する端緒を作ってみたい。

ウィリアム・ジェームズ (William James, 1842-1910) は生理学の研究者として出発し、その後心理学と哲学の教員をつとめた。彼は1890年に "The principles of psychology" を出版した。この書籍は大部なもので、現在容易に入手できる Dover Books 版では上下2巻、ほぼ1,300ページを越える。これはあまりにも大部であったので、1892年には "Psychology; The briefer course" が出版された。後者は今田恵の訳で岩波文庫から上下2巻の翻訳が1939年に出ている^{(注1)(注2)}。本稿における "The principles of psychology" および "Psychology; The briefer course" の内容に関する記述はDover Books 版によるが、後者については岩波文庫の今田恵訳を適宜参照する。なお、「情動」の語は "emotion" の訳語として定着しているが、ある程度古い心理学書においては「情緒」が訳語としてあてられている場合が少なくない。しかしここでは検討対象となった書籍の引用や、それに対する言及以外では「情動」の語を使用することにする。また、第2節においては、"Psychology; The

briefe course" の内容に言及した場合、特に出典を示さず、ページのみを示した。

1. 「泣くから悲しいのだ」の取り扱われ方について

はじめに述べたように、ジェームズの「悲しいから泣くのではない、泣くから悲しいのだ」という主張はたしかに、一般の常識における順序とは異なっている。換言すれば我々の現在の常識は百年前の常識と変わっていない。我々は普通、ある人が愛情の対象を永久に失った場合に、その人は悲しみを感じると考える。その場合、この人物が泣くかどうかを断定的に予測することはできないが、泣く蓋然性がかなり高いことは容易に理解する。従って、悲しみの感情は泣くという行動の先行条件としては十分に妥当であるが、その逆の順序、すなわち泣くという行動を先行条件としなければ悲しみの感情は生じないという主張に対しては、困惑するのである。従って、もしもそのような常識に反した順序が提案されるとすれば、そこにはかなり周到に準備された証拠の提示や、明確な論理の展開があるに違いないと考えることは間違っていないだろう。しかしジェームズの有名な主張を紹介する場合に、その主張の根拠が明示されている例は見ないし、そもそもこの主張に明確な根拠があったのかどうかを論じた記述も筆者は見たことがなかった。

本稿の目的はジェームズのこの主張の根拠を探るための糸口を作ることであるが、そのための前提として、まずこの主張の根拠について述べた資料が見あたらないという筆者の経験が事実であるかどうかについて明らかにする必要があるだろう。

ジェームズの「悲しいから泣くのではない、泣くから悲しいのだ」というユニークな主張は、大学で心理学を学ぶ学生が必ずといってよいほど目にすることであると思われる。この主張そのものが頻繁に紹介されるのに比べ、この主張の根拠についてはほとんど語られることがないことを示すためには、おおむね1900年以降の心理学の初等教科書を網羅的に調べる必要があると思われた。しかし筆者が心理学を学び始めた時期（1960年代の終わり）以前の

書籍を検索することに困難があっただけでなく、大学図書館の蔵書にも初等教科書はごく限られていた。それでも、ある程度の数を調べることによってジェームズの主張が実際に教科書に頻繁に現れること、またその主張の根拠については説明が見られないことを検証できると思われたので、ここでは限定的な資料のみに基づいて検証を試みる。

ここで分析の手がかりとしたのは以下の3点である。ジェームズの「泣くから悲しいのだ」という主張が、それまでの常識に対立するものであったという記述 (A) の有無、もし常識に対立する主張であるとすれば必要であると思われるジェームズの主張の根拠 (B) の有無、およびジェームズの主張に対する根拠付きの反論への言及 (C) の有無である。

教科書の検討

筆者自身が大学生であった頃に、心理学の初等教科書としてよく使われていた「心理学 (II) 八木冕 (編)」を最初の例としよう。第6章4節「情緒」の項で、今村 (1968) は、「情緒体験がどのような中枢機構に依存しているか、またそれが内臓諸器官の活動の変化といかなる関係をもつかということは古くしかも新しい疑問である。すでに前世紀末に LANGE は、刺激によってまず血管運動の変化が生じ、そこからの感覚インパルスが情緒体験をひきおこすと述べている。JAMES [1884, 1890] は、情緒の体験と表出との関係にふれながら、従来の考え方と正反対の見解を提唱し、"興奮的な事象の知覚に直接ひきつづいて身体的変化が生じる。そうした身体的変化の感じが情緒にほかならない" とした。したがって、"泣くがゆえに悲しい。打つがゆえに腹が立つ。ふるえるがゆえに恐ろしい" のであって、その逆の順序ではないというのである。(p.92)」と記述する。さらにジェームズ・ランゲ説への批判として「なかでも CANNON [1927] は、(1) 内臓を中枢神経系から完全に切離しても、情緒的行動に変化が生じないこと、(2) まったく異なる情緒の状態あるいは非情緒的状态で、同一の内臓の活動に変化が生ずること、(3) 内臓が比較的感覚の鈍い器官であること、(4) 情緒体験の原因と

なるにしては、内臓活動の変化はあまりに緩徐であること、および (5) 激しい情緒において典型的に認められる内臓活動の変化を人工的におこしても、情緒は生じないこと、などの反証をあげている。」と記述している。

ここでは、ジェームズ・ランゲの理論が「従来の考え方とは逆であったこと」「キャノンによって批判されたこと」が明示されている。また、キャノンの反論には（反論であるから当然であるとも言えるが）論拠が示されているのに、「従来の考え方とは正反対」のジェームズらの見解については、その論拠は示されていない。つまり、「A：従来の考え方と逆であるという陳述」「B：論拠が示されること」「C：キャノンによる批判の存在」の3つを「三点セット」と考えれば、AとCはあるがBがない。実は、多くの心理学のテキストは、本来あるべきであると思われる三点セットではなく、AとCからなるB抜き二点セットでできあがっているようである。そのことを以下の記述で明らかにしたい。

八木の「心理学」から約20年後に出版された「初めて学ぶ心理学（名城・東江編著）の中で、中村（1986）は情動の学説としてまずジェームズ・ランゲ説を紹介するが、そこでは「常識的な順序」の問題には触れることなく、「情動にともなう意識体験と生理・身体的変化との関係について、ジェームズ（James, W.）は『悲しいから泣くのではなく、泣くから悲しいのである』という見解を示した。彼によると、まず刺激事象の知覚によって身体的変化が生じ、その変化の知覚が情動であるといわれる。」と書いている。ついでキャノン・バード説を紹介し、「キャノン（Cannon, W.B.）は動物実験や各種の研究結果を根拠に、ジェームズ・ランゲ説を批判し、情動体験や情動反応に関する視床機能を重視する説を提唱した。」と述べている。つまりジェームズの説が常識に反しているかどうかの記述はなく（Aがない）、ジェームズの主張の根拠についても述べられず（Bがない）、キャノンの批判が採用されている（Cがある）。形式的には、ジェームズの主張がそれまでの常識に反しているという前提がないのであるから、ジェームズの主張の根拠を述べる必要がないとも言える。このような叙述の仕方は特に新しいというわけ

ではなく、春木（1966）でも同様の構造が見られる。

比較的最近の教科書であるが、鹿取・杉本（編）の「心理学（1996）」では、「動機づけ・情動」と題された章にも、「心理学の歴史」と題された章にも、ジェームズの名前だけでなくキャノンの名前も出てこない。長谷川・東條・大島・丹野（2000）の「はじめて出会う心理学」では情動や感情の章はなく、「脳と心」の章で情動に関する記述があるが、辺縁系、扁桃核、前頭前野など、神経学的記述が主であり、やはりジェームズもキャノンも出てこない（ジェームズの名前は、「心の発達」の章で赤ちゃんの意識に関する記述で出てくる）。もちろん教科書の編者の方針や、ページ数の制限によるテーマの取捨選択がありうるから、これらの事実をもってジェームズの情動理論が最近教科書に登場しなくなっているとは言えないだろう。中村（2000）は「テキスト心理学」の6章でジェームズ・ランゲ説とキャノン・バード説とを、「末梢の変化が必要説」と「視床に起源説」の対照として紹介している。ただし索引にはキャノンの名前はなく、ジェームズの名前もこの章ではあげられていない。

英語圏の心理学教科書ではジェームズの主張はどのように扱われているのだろうか。Munn（1966）は *Psychology*（5th Edition）で、「長い間、ひとはまず情緒を体験し、ついでこれが身体的変化を生じるのだと考えられてきた。情緒に関するジェームズ・ランゲ説はこれと正反対のことを主張する。この説によれば、ひとはまず身体の変化を生じ、情緒的体験とは、その身体的変化が生じた際の、これらの変化の感覚（原文イタリック）である。この説はバード・キャノン説（ママ）とよばれる別の理論に引き継がれたが、これは体験と身体的変化の両者が（原文イタリック）視床下部の活動によって同時に引き起こされるというものである。（p.205）。」この教科書ではAがあってBがないが、Cについてはやや曖昧である。つまり、この記述であれば、キャノン・バード説はジェームズ・ランゲ説への批判ではなく、むしろその拡張版であるとも読めるからである。

ジェームズの主張を紹介したあとでキャノンらの批判を述べるという記述

の仕方が、流行遅れになったというわけではなさそうである。ごく最近の教科書でも同じ手法が踏襲されている。Kosslyn and Rosenberg (2001) は、「情動が以下のように作用することは、明白かつ論理的であるように思われる。あなたが特定の状況にいるとしよう。その状況は特定の情動を引き起こす。その情動はあなたを特定の行動へと導く。たとえばジョンは脅され、怖くなり、逃げ出す。100年以上も前にウィリアム・ジェームズ (1884) は、情動と行動の間にあるこの関係は直感的にはいかにももっともらしいが、実際には全く逆である、と主張した。ジェームズが信じるところによれば、我々が情動を感じるのは身体が反応した後である。たとえば路上でお金を脅し取られそうになった場合、ジェームズによれば、我々はまず逃げ、その後で怖いと感じるのである。ジェームズによれば、恐怖の情動が生じるのは逃走するという身体の状態を我々が感じ取るからである。(p.316)。」これに対する反論は以下のように記述されている。「ウォルター・キャノン (1927) は、ジェームズ・ランゲ説は心臓や呼吸活動など身体的な信号に過度の注意を向けていると言う。キャノンはジェームズ・ランゲ説に痛烈な批判を浴びせた。つまり身体の反応が起こるためには何秒もかかるのに対して、情動は身体反応の開始に先立って存在している。(中略) キャノン・バード説によれば生理的な活性水準と感情の体験は同時に (縦に並んで) 生じるのである (p.316)。」つまり、「(直感とは) まったく逆 (A)」であるのにその根拠は提示されず (Bがない)、キャノンらの批判が具体的に述べられる (C) というB抜き二点セットは現在でも健在なのである。

心理学の教科書としては歴史もあり、内容にも定評があると思われる "Hilgard's" の心理学 (12版) (1996) の記述では「あきらかに自律神経系の活性水準は情動体験の強さと関係している。しかし自律神経系の活動から情動の区別ができるだろうか。喜び、怒り、恐れ等々にそれぞれ対応する特定の生理的活動のパターンが存在するだろうか。この疑問は100年以上も前にウィリアム・ジェームズが書いた独創的な論文にまでさかのぼる (James, 1884)。その論文の中でジェームズは、身体的変化の知覚こそ (IS: 原文は

大文字) が情動の主観的体験であると述べた。(中略) デンマークの生理学者、カール・ランゲもほぼ同時期に同様な見解に達したが、ランゲの身体変化には自律神経系の活性水準が含まれていた (p.382)。」そしてこの見解は、「1927年に生理学者ウォルター・キャノンによって批判された。彼は主として3つの批判を行った」が、その批判として、内臓変化のスピードが遅いこと、人工的に身体変化を作り出しても真の情動は体験されないこと、生理的な変化は情動ごとに異なるとは言えないことが述べられている。ここにはAに相当する部分がないからBに相当する部分も存在しない。ジェームズの主張を、それ以前までの見解や常識と対比させるのではなく、全く独創的なものと見るのであれば、根拠は不要となる。このような書き方をすれば、Cのみで十分なのであろう。

キャノンによる批判が公になる以前にはジェームズの主張はどのように扱われていたのであろうか。大正6年に岩波書店から発行された「心理学」(高橋穰, 1917, 1921)の概略はこうである。「ジェームズの情緒説は従来の情緒の見方を逆にしたものである。」「同様の意見はランゲによって発表せられた。」「此の説の論拠は二ある。」「身体感覚が情緒と同一とまでは言えないが、重要な組成成分であることは認められている。」

この書は冒頭に述べたキャノンによる批判が公にされる以前の著書であるため、キャノンの批判はないが、かわりにヴントの批判が述べられている。情緒と身体感覚とが同一であるというジェームズの主張に対するヴントの批判は、身体的表出が遅い場合がある、身体的感覚では情緒の複雑性を説明できない、身体変化と情緒の対応が一定していない、という3点であるから、ヴントの批判の要点はほぼキャノンのものに近いと言ってよいだろう (p. 367-368)。ここで興味深いのは、高橋が「此の説の論拠は二ある」と述べている点である。高橋によればその二つとは「内省上情緒から感覚を抽象すれば情緒はなくなる」こと、「酒を飲めば幸運来たらずとも愉快に感じ、『はいとりたけ』^(註3)を食せば、理由なくて腹が立つ。もし情緒が身体的変化から合成すとせばこの現象は解し易いが、然らざれば不可解である(一部の漢字

表記を改めてある)」の二つである。最初の論拠は後で述べるようにジェームズ自身が根拠として語っている。後者は、高橋の発明になるものと言えるが、先行する体験なしに脳内化学物質の作用によって情動が生じることを示した点で卓見と言える。ここで初めて我々はABCの三点セットに出会ったと言えるだろう。

執筆者自身がジェームズ・ランゲ説に対して否定的な見解を持っている場合はどうであろうか。谷田部（1950）は、キャノンの知見を紹介することから始める。つまり、逃走か闘争かという反応に際してまずアドレナリンの分泌が生じて全身の生理的活動が一変することを示し、このような身体活動の変化が感情に影響を及ぼさないはずがないというのである。そしてその上で、「ジェームズ（W.James, 1884）及びランゲ（G.Lange, 1885）は情緒を以て身体的変化の感じであると云ひ、かの有名な情緒のジェームズ・ランゲ説なるものを提唱した。ジェームズによれば悲しいから泣くのではなく、泣くから悲しいのであり、怖いから顫へるのではなく、顫へるから怖いのであると云われた。（中略）然るにこの説に對しては多くの反對が稱へられた。そのうち最も明瞭な所論として上述したキャノンの反對説を紹介して置くことにしよう（p.74）。」谷田部は、ジェームズ・ランゲ説に対するキャノンらによる批判として、脊髓神経を切断したイヌにおいて、あるいは交感神経を切断したネコにおいて情動表出行動（顔面の表情や、うなり声など）は全く影響されなかったという点、また内臓筋に変化が生じるためには数秒以上が必要であるのに、感情の反応は1秒以下で始まるという点にあることを述べている。谷田部はさらに、「かく内臓起源説の支持し難きことが明らかとなるにつれ、ジェームズ説の支持者は骨格筋の反応を以てこれに代へようと努力するに至った。併しこれも亦支持し難きものである點について・・・（中略）かく情緒のジェームズ・ランゲ説なるものは近頃の研究の結果、そのままの姿では到底支持し難きものであることが明らかとなった。（pp.75-76）」と結論づけている。つまり谷田部の考えでは、ジェームズ・ランゲ説はキャノンによって論破された（誤った）理論であるから、その説がそれまでの考え方

と正反対であると述べたり、正当性の根拠を示したりする必要はなく、従ってCのみで十分ということなのであろう。

逆に、キャノンの方を無視している教科書もある。Trotter and McConnell (1978)の "Psychology, the human science" では、「1884年にハーバード大学の心理学者ウィリアム・ジェームズは、情動性の認知的あるいは心的な側面がほぼ完全にわれわれの身体反応によって決定されていることを示唆した。ジェームズによれば、もし我々が森を歩いていて巨大で空腹なクマに遭遇したとすれば、我々は逃げ出す。我々が逃げ出すのは、過去の学習から、我々の自律神経系が即座に活動を開始し、クマから遠ざかせようとするからである。数分後、安全な場所についてから、我々は自分が何かから逃走してきたこと、そして身体はまだ生理学的に活性水準の高い状態にあることに気がつく。それで我々は、自分はきっと恐ろしかったに違いない、なぜならば自分はそのような行動をしたからだ、と推論する。ジェームズは『我々は走ったから怖かったのだ。怖かったから走ったのではない』と述べている。しかし多くの理論家はジェームズには同意しない。今日の心理学の一般的見解によれば、情動的状態における我々の生物学的反応は、ただ一つの主要な効果しか持っていない。それは多様な入力刺激を処理しまたそれらに対処する脳の仕方を変更することである。(p.159)」著者らはキャノン・バードには言及していない。今日の帰属理論の立場にジェームズが立っていたことを示唆する書き方であるが、ここにジェームズ理論への批判が提示されていると判断するかどうかは即断しかねるところであろう。

ジェームズにもキャノンにもまったく言及しない教科書もある。McKeachie and Doyleの "Psychology" (1966)では、章立てに情動 (emotion) の章がなく (emotion に関わる記述は motivationの章にある)、またジェームズの名前は教科書のどこにも出てこない^(註4)。この教科書では emotion は「特定の行動や生理的出来事が伴う感情 (feeling) である」と説明されているが、この説明自体はジェームズの見解に近いと言えるかもしれない。

専門書の検討

これまでの例では、いずれの記述をみても、一見して正当とは見えない主張をなぜジェームズが行ったのかという点については、高橋を除いて記述がない。この点について、心理学の初等教科書ではなく、心理学、あるいは感情心理学の専門書を調べてみる必要があるだろう。

佐藤俊彦（2005）は「血圧と行動」と題された章中で、まずキャノンの理論について述べ、緊急事態対処のために交感神経系が作用することを示した上で、交感神経系の活動に起因する生理的変化が感情の体験を規定する場合があるとしてジェームズ・ランゲ説を紹介するという手順を踏んでいる（p. 40-42）。歴史的経緯から見れば順序が逆転しているが、交感神経系の活動がいかに関与する生理的変化を生じさせるかを示し、その一環として感情の体験への影響を論じるという、前述の谷田部（1950）の手法を踏襲したものと言えよう。

ジェームズ説、ランゲ説を含め、様々な情動理論の解説を試みたものに鈴木直人（2001）がある。この解説は、ジェームズが自分自身の理論（説）について、大まかな情動と繊細な情動を区別し、自説が前者にのみ当てはまると述べていることを紹介している点で優れているが、ジェームズ・ランゲ説の最大の批判者としてキャノンの説を提示するところは、いわば公式通りとすることができるだろう。また、「彼のこの主張は（中略）これまでの常識的な考え方をくつがえすものであった（p.16）」と述べるにとどまってジェームズの主張に根拠があるかどうかには言及していないので、典型的AC二点セットである。

感情の諸理論をダーウィンの系譜、ジェームズ・ランゲ説の系譜、認知説の系譜、そして社会的構成主義の系譜の4つの視点から整理してまとめたコーネリアス（1999/1996）の著作は、ジェームズ・ランゲ説が引き起こしたインパクトについて詳細に記述している。とりわけ、「末梢起源」に関するジェームズの最初の著作（James, 1884）を頻繁に引用しながら（もちろんキャノンによる批判も取り込みながら）、ジェームズ・ランゲ説のその後の経緯を

たどっている。ページ数だけでの比較であるが、他の3つの視点の解説にあてられているのがそれぞれ43～47ページであるのに、この系譜だけが67ページを占めていることは、それだけ書くべきことがあったということの証左であろう。詳細であるということのを別にすれば、「ジェームズは、この感情経験の順序の常識はまったく誤りである、としています」という記述はあるが(p.71)、なぜ誤りであるとするのかという根拠についての説明がなく、「ジェームズ・ランゲ説の変遷を解説する標準的なテキストには、アメリカの心理学者ウォルター・キャノンがジェームズの手を負えない敵として、1930年代以降、この説が顧みられなくなった原因を作った張本人の科学者として書かれています」(p.84)という記述があるのみであるから、これも典型的AC二点セットである。

心理学の教科書というよりは心理学自体を対象とした研究書と言うべき「心理学」の中で、岩下(1998)は、19世紀は本質的に生理還元主義の時代であり、感情が生じる機序の説明は、身体過程先行的であるとする末梢説が大勢を占めていたのであり、ジェームズ・ランゲ説と呼ばれるものはその一典型であった、と解説する。そのうえで岩下は、ジェームズの「The principle of psychology (1890)」(p.449-450)から「泣くから悲しいのである」を含む部分をやや長く引用し、この中心部分が「多くの心理学書に引用されている^(註5)」ことを示している。さらに岩下は、「The principle of psychology (1890)」のp.449を指し示して、ジェームズが「反論」した「従来の見解」とは情動の中枢説(あるいは学会における主流の考え方)ではなく、「常識」であったと述べている。

この「従来の見解」が「常識」であったという見方は興味深い。ハーバード大学の心理学の教授であったジェームズが、当時すでに「主流」になっていたはずの「末梢説」を擁護するために、「末梢説にあわない常識」を批判する必要に迫られていたとは考えにくい。しかし別の見方をすれば、ジェームズは心理学者であるよりはすでに哲学者(しかもとりわけ意識の哲学者)であったので、一見常識に反する記述をすることは彼一流のレトリックだっ

たと見なせないこともない。

最後に、ジェームズの「Psychology; The briefer course」を翻訳した今田恵の著書を見てみることにしよう。今田は「現代の心理学」(1958)の中で、「(ジェームズの主張は) 文学的表現のために、奇矯に聞こえるが、その真意は『身体的変化は、刺戟を与える事実を知覚した直後に起る。そしてその身体的変化が起っている時、これを感じるものがすなわち情緒である』ということで、その原理は、すべての意識には必ず大脳過程が条件となっており、一つの意識が直ちに他の意識の直接の原因にはならぬという彼の心理学の根本的作業仮説に基づいている。」と述べている (p.183)。

ジェームズの表現はレトリックであって、ことさらにそれまでの常識に対立する仮説を提唱したわけではないとの主張であると読めば、Aはなくてよい。キャノン・バードの批判についてはもちろん書かれているから、Cがある。そして「一つの意識が直ちに他の意識の直接の原因にはならぬという彼の心理学の根本的作業仮説に基づく」という表現は、これまで見てきた文献の中で、唯一、ジェームズの主張に理論的な根拠があることを示したものと言える。しかし、「一つの意識が直ちに他の意識の直接の原因にはならぬという彼の心理学の根本的作業仮説」とは一体何であろうか。次節ではこの点を中心に考えてみる。

2. ジェームズの主張の根拠

ジェームズが何を根拠として「泣くから悲しいのだ」と述べたのかについては、ジェームズ自身の著作に立ち戻らねばならない。そこでまず1892年の"The briefer course (以下「概論」と記す)" 第15章(今田恵訳では第24章)の"EMOTION"の記述を見ることにしよう。ジェームズの「情動」が、情動を喚起する対象の知覚から始まる一連の心理・生理的過程ではなく、体験としての情動であることは上述の教科書等の引用からもわかる。その意味では、厳密に言えば、ジェームズの「情動理論」は少しも「情動」の理論などではなく、「情動体験に関する説」さらに厳密に言えば「情動体験の意識」

に関する説である。しかしそのような指摘をしたからといって、ジェームズの主張に根拠がなくてもよいというわけにはいかない。

この章の冒頭は次のように始まる。「情動と本能の比較 環境内に特定の対象が存在する場合、情動は感覚の傾向であり、本能は行為の傾向である。(p.240)。」ジェームズにとって、情動と本能とは区分しがたいものである。("it becomes a little hard in many cases to separate the description on the 'emotional' condition from that of the 'instinctive' reaction which one and the same object may provoke.") つまり、同一の対象がその感覚(情動)を生じさせるとともに行動をも生じさせる。

ジェームズは「情動」をまず「粗な、大まかな (coarser)」ものと「微妙・繊細・希薄 (subtler) なもの」に分ける。前者は今日の心理学者の多くが疑いもなく「情動である」として認めるような、怒り、恐怖、愛、嫌悪、喜び、悲しみ、恥、誇り、等々である。後者は、「道徳的、知的、そして美的な感情」であり、その身体反応はずっと弱い。従ってこの時点でジェームズは、強い身体的反応を伴う情動と、それらを伴わない情動の二種類を、身体的反応の強度によって区別していると考えて良いであろう (p.241)。

次にジェームズは、情動を言語的説明によって区別していくと際限がないこと、つまり情動は区別しようと思えばいくつにでも区別できると主張する ("They distinguish and refine and specify *in infinitum* without ever getting on to another logical level." (p.242))。なぜこのように無限に多数の情動が区別できるのかと言えば、それはそれらの情動が個別的なものではないからだというのがジェームズの説明である。

この点については、ジェームズの考え方は、イザードやエクマンに代表される「個別的情動理論 (differential emotions theory, discrete emotions theory)」とは異なっている (例えば Izard, 1997)。つまりイザードやエクマンの考え方では情動はタイプとして捉えられるのに対して、ジェームズの見方によれば情動はディメンジョン構造の中で捉えられていると言ってもよい。ジェームズ自身がディメンジョンに言及しているわけではないが、多数の生物種が

遺伝と変異というメカニズムで説明されるように、「より一般的な少数の原因 (more general causes)」によって無限に多数の (あるいは多数あるように見える) 情動は説明することができるだろうと言うのである (p.242)。そして、まず粗大な感情に限るという制約付きで、多数の情動を説明する「一つの一般的な原因」の候補として、身体表出 (bodily expression) を挙げる。

そこで有名な主張があらわれる。"My theory, on the contrary, is that the bodily changes follow directly the perception of the exciting fact, and that our feeling of the same changes as they occur IS the emotion." ここで忘れてはならないことは、ジェームズの「情動 (emotion)」が今日的な辞書的定義 (つまり生理的な反応や表出行動を含んだ心的・身体的な全過程) ではなく、章の初めの、「emotion は feeling です」という取り決めを前提にしていることである。しかしそれにしても常識では、クマに出会ったときには逃げ出すより前に何らかの恐怖の感覚が生じるのではなかろうか。ジェームズは上述の主張の直後に "The hypothesis here to be defended says that this order of sequence is incorrect, that the one mental state is not immediately induced by the other, that the bodily manifestations must first be interposed between, and that (後略)" と述べ、次いで「知覚によって生じる身体変化がないとすれば、その知覚はおそらく純粹に認知的であり、弱々しく生彩のない、情動的暖かさを欠いたものであろう。」と述べる。そしてさらに、「それほど深く考え込まなくてもこの主張が正しいことはわかってもらえるだろう」と述べる。つまり、泣くから悲しいのだという常識に反した理論は、「心の状態が直接に心の状態を生み出すことはないのだから、かならず身体の変化が介在するはずだ」また「身体変化がないと情動にはならない」という2つの主張のみによって支えられていることになる。

この最初の部分は、今田訳では「一つの心的状態が直接他の心的状態から喚起せられることはない。身体的表現がまず両者の中間に介在しなければならぬ」と訳されている。なお、今田の「現代の心理学」ではこの部分は「一つの意識が直ちに他の意識の直接の原因にはならぬ」と表記されている。心

的状态と意識とが同じであるかどうかは問題であるが、「概論」の「意識の流れ」の章には "Every state is part of a personal consciousness. (p.19)" とかかかれているから、「一つの意識」を「一つの意識状態」と読んでも間違いではないであろう。

しかしこの2つの主張にはまだ根拠が示されていない。そこでジェームズの論理を完成させるために、かなりジェームズの考え方にひいきすることにしよう。一つの心的状態（または意識）が直接他の心的状態を喚起しないということは、「飢えた熊の知覚」は直接に身体変化を生じるという主張だと考えよう。また、情動が身体的表現の知覚であるとするれば、少なくともある種の身体的表現は知覚されることが保証されなければならない。身体的表現が生じて、身体的変化が直接に心的状態を喚起することがないとするれば、心的状態である情動は生じないからである。とするればジェームズの「情動の体験の原因は身体的変化にある」という主張に根拠を与えるためには、1) 情動体験という心的状態は直接に他の心的状態から喚起されることがない、2) 身体変化の知覚が情動である、というだけではならず、さらに、3) 身体変化は心的状態（それが情動であるかどうかはともかく）を作り出すことができること、また、4) 知覚という心的状態によって広範囲な身体的変化を直接に生じることがあるという2つの付加的な主張が正しいことを示す必要がある。実際ジェームズは3番目の主張と4番目の主張については体験的な説明で根拠づけようとしている。2番目の主張は3番目の主張が支持されれば受け入れてもよさそうである。しかし第1の主張については根拠が見あたらなかった。

ジェームズはまず第4番目の主張について例を挙げる。詩の朗読やドラマの視聴、あるいは音楽の聴取において鳥肌が立ったり、心臓が高鳴ったり、落涙することがあるという例である。ジェームズは他に、断崖の際に友人が立ったときに感じる「背筋のぞくっとする感じ」や、流血をみて失神する例を挙げている。今日の心理学の知見からすれば、後者の二つの例が「知覚が直接に身体反応を生み出す」例として適切かどうかは疑問である。しかし、

たしかにある種の音楽の聴取は、音楽そのものが特定の情動的体験や何らかの知識と直接に関わっていなくても鳥肌の立つ感じを起こさせることがあるように思えるから、とりあえずこの第4番目の主張については受け入れることにしよう。なお、この第4番目の主張の根拠として、ジェームズはさらに、特定の対象なしに生じる病理的情動を例に挙げているが、これは最前に高橋が二つ目の理由として述べた例に相当すると言ってよいであろう。

第3番目の主張の根拠として、ジェームズは、「いかなる身体的変化も、それが生じたそのときに、強度の差はあれ、感じるができる」という(p.245)。なぜなら、「ひとの全身はくまなく識別力をもって生きている。鮮明なことも不鮮明なことも、また快であったり苦痛であったり、あるいは本当のものかどうか疑わしいこともあるだろうが、その識別のひとつひとつが、だれもが必ず持っている『これが私だ』というあの感じに躍動感を与えている(p.245)」からである。

ジェームズの第3の主張「いかなる身体的変化も、それが生じたそのときに、強度の差はあれ、感じるができる」について、もしもこれを「身体的変化が存在しないとき、いかなる感覚も生じない」と読むことができるならば、「強い情動状態にあると仮定して、その体験の意識から身体的感覚のすべてを取り除いたとすると、あとには何も残らない(p.246)。」と言えるだろう^(注6)。しかし、この第3の主張は、論理的には「いかなる感覚も生じないとき、身体的変化は存在していない」ということしか含意していない。これを補うものが第1の主張であるはずであろう。

第4の主張と第3の主張を組み合わせると、「身体反応を直接に引き起こす特殊な知覚が存在し、その身体反応は必ず意識される」ということになるだろう。身体反応を直接に引き起こすような知覚が前提されれば、かならずその知覚によって生じる身体反応は意識されるのであるから、もし身体反応の意識が情動の体験であるとするならば、身体運動を直接に引き起こすような知覚はそれに引き続いて情動の体験を「必ず」生じることになる。

しかしこの論理は、「身体反応を直接に引き起こすような知覚が、身体反

応を経由することなしに情動体験を生じる可能性」を排除しない。この可能性を排除するためには、「知覚という心的機能によって情動体験の意識という心的機能が喚起されることはない」と述べておかねばならない。だから、ジェームズの第1の主張は、ジェームズの情動理論にとっては必要不可欠な主張であるということが出来る。つまり第1の主張が成り立たなければ、「その体験の意識から身体的感覚のすべてを取り除いた」ときに「何も残らない」とは結論できないからである。

もちろん字義通りに「何も残らない」わけではない。激怒から身体感覚を取り除いたあとに残るのは「血の通わない無感情の (dispassionate) 判決とでも言うものであって、完全に知的な領域に限定されており、ある人なり人々がその罪に相応の叱責に値するというだけのことでしかない (p.247)。」つまりジェームズのここでの主張は、端的に言えば、情動体験の中心は身体的変化それ自体であって、身体的変化が失われてしまえば「もはや情動ではなく単なる知的認識」になってしまうということである。ジェームズはこの部分の記述が彼の理論における主要部分であると述べている (p.246) から、彼の情動理論で本当に重要なのは、常識に反する体験 (意識) と身体変化の時間的順序そのものではなく、身体変化が情動体験において占めるその広さであったとすることができるだろう。

ジェームズの第1の主張、"The one mental state is not immediately induced by the other" 「一つの心的状態が直接に他の心的状態を呼び起こすことはない」という主張は、「概論」の情動の章中ではついに論じられずに終わっている。この主張は全く論じる必要がないほど直感的に正しいのだろうか。

今田恵が「その原理は、すべての意識には必ず大脳過程が条件となっており、一つの意識が直ちに他の意識の直接の原因にはならぬという彼の心理学の根本的作業仮説に基づいている (今田恵、1958)」と述べていることについては先に述べた。ここで問題なのは「一つの意識が直ちに他の意識の直接の原因にはならぬ」ことがジェームズ心理学の「根本的作業仮説」であったかどうかという点である。残念なことに今田はジェームズの「根本的作業仮

説」についてはこれ以上何も触れていない。

筆者はジェームズ哲学やジェームズ心理学の全容には疎いので、この短い記述が（ジェームズ哲学やジェームズ心理学に詳しい人々にとっては）当然のことであるのかどうかという問題については判断ができない。しかしよく言われるようにジェームズ哲学が意識の哲学であることを前提として、そしてこれまた人口に膾炙した「意識は常に何ものかについての意識である」という言葉を借用することによって、ジェームズの第1の主張の根拠について多少の議論を加えてみたい。それは、（ジェームズの考えにおいて）意識は意識を意識したり、意識を作り出したりすることができるかという問題に帰結するだろう。とくに後者は、意識は直接に感情（という意識過程）を作ることができるかという問題に帰結するだろう。

もしも「意識は何ものかについての意識である」とすれば、意識は意識自体を意識することはできない。意識は意識以外のなにかを対象として意識することはできるが、現在進行中の過程である「意識」には自分自身を認識の対象とする能力に欠けていると考えることになるだろう。もちろん意識は、「過ぎ去った意識的活動」の記憶（メンタルなイメージ）を意識の俎上に載せることはできる。また、当然のことと思えるのだが、意識が意識の対象とすることができるのは、それが過去に属する事象の記憶（というメンタルなイメージ：心的表象）であれ、まったくの空想であれ、現前する表象だけであると言ってよいだろう。つまり「～について」という対象抜き意識過程はありえないために、もしも感情が意識されるとすれば、そのためには何か別の過程が感情（たとえば喜び）の心的表象を作るのでなければならない。つまり特定の感情を意識できるということは、何か意識以外の過程が意識の対象を「作り出した」からに他ならない。ではいったい何が意識の対象を作り出したのか。

ミンスキーの「心の社会」（1990）のように、心を多様な機能モジュールの集合体と考えるしかたがジェームズになかったとすれば、ジェームズにとって意識以外の心的機能は（ある意味で十把一絡げに）身体に所属するもので

あったのかもしれない。しかしジェームズの思索を追うと、心的過程と身体的過程の関係についての認識はかなり揺れ動いていたように思えてくる。

今田(1956)に収録されている「心と他物との関係」と題された章(p.283)の出典は「Principles of psychology (『原論』)」第8章「The relation of minds to other things」であるが、ここには「心理学者の認識に対する態度は、(中略)徹底的な二元論である。二つの要素、すなわち、知る心と知られる物とを仮定し、それらを還元し得ないものとして論ずる。何れも自分から出、或いは他方に入る事は出来ない。何れも如何にしても他方ではあり得ず、又他方を作らない。二つは共通の世界において向い合って立っているだけであり、一方がその相手を知り、或いは相手に知られるのみである。(中略)或る種の合図が物からその心の脳に与えられねばならぬ。然らざれば知識は生じない。」そして「知識が一度生じたならば、その物がどうなろうと、知識はその儘であり得る。」また、「知識自身は決して物に影響を及ぼさない。」とも述べられている(原著ではp.218-219)。

これは非対称の二元論とでも言うべきものであろう。ジェームズは彼の情動説を「これは唯物論ではない」と述べているが、「心と他物との関係」を読む限りでは、彼は素朴な実在論(認識の主体が存在しようとしまいと、客観世界に物質や現象が存在するという信念)を持っているように思われる。もしこの部分がジェームズの「根本的作業仮説」であるならば、確かに意識(知る心)は身体の変化なしには何も意識することができない(何も知ることができない)ことになる。

「原論」第8章「心と他物との関係」に相当する章は「概論」にはみあたらない。「概論」には「Psychology and Philosophy」と題されたエピローグに、「The relation of State of Mind to their 'Objects'」という項がある(p.331)。しかしここではジェームズは「単純な二元論を持ち続けることは難しい」と言い、「心に現れる純粹な感覚(という現象)が、「心」と「もの」という二つの実在の間関係として、直接にもたらされることはない」と言う。そうすると、身体の変化はいったい「情動」をもたらすのか、それとももたらす

わけではないのか、どちらなのであろうか。

3. 弱い情動は情動でありうるか

ジェームズは彼の「末梢起源説」が「粗雑な情動」には当てはまると論じているが、「繊細な情動」についてはどうだろうか。彼は「繊細な情動」という節を設けて、自説が「繊細な情動についても完全に成り立つ ("the experience is completely covered by the terms of our theory")」と主張する。その根拠 (らしきもの) として、彼は、"Our theory requires that incoming currents be the basis of emotion." と述べている。そして「それによって内臓の変化が生じるかどうかにかかわらず」芸術作品の知覚はつねにまずもって incoming currents だというのである。この「外部からの流れ込み」というのは、要するに意識に流れ込む刺激のことであろう。ジェームズの論理に従えば、意識は意識機能によって新しい意識対象を作り出すことができないという制約のために、情動を体験するためには意識以外の外来の刺激を必要とする。「粗雑な情動」の場合には、この刺激は身体の変化であった。「繊細な情動」についてはその外来刺激は身体の変化である必要はなく、対象の知覚そのものでもよいというわけである。

このジェームズの二つの主張は一見して矛盾に陥っている。「粗雑な情動においては情動の体験は身体の変化の知覚によって生じる」が「繊細な情動においては情動の体験は情動の体験を生じさせている当の対象の刺激によって生じる」というのである。しかし「粗雑な情動」と「繊細な情動」の違いは、「相対的に見て強い身体的活動を伴うかどうか」であるのだから、この二つの主張を矛盾しないものとするためには、「感情体験は外来刺激のみによっても成立するのであるが、身体的変化があればその感情体験はさらにずっと強力なものになる」とジェームズが考えていたと推論する必要がある。つまり、ジェームズの主張はごく常識的に、「強い情動の体験が強く感じられるのは身体的変化の量が大きいためからである、身体的変化がごくわずかであっても知覚対象の刺激によって弱い感情体験は感じる事ができる」のように

書き換えることができるだろう。

「まったく身体変化がない場合」において情動が生じることはありえないのだろうか。これについてジェームズの態度はあいまいであるとしか言いようがない。つまり "there may be purely cerebral emotion, independent of all currents from outside. (p.251最下段)" であるが、しかしこれは非常に "thin" であり "pale" なものであるという。さらに、そのような情動は情動と言うよりは認知的なものである (p.252) というのであるから、要するに身体的変化がない情動が存在することを認めているようにも見受けられる。その一方で、どのような小さい知覚であっても、身体の全体の変化が生じる ("we might say that very possible feeling produces a movement, and that the movement is a movement of the entire organism, and of each and all its parts.") と、ジェームズは直前の章で述べている (p.237) のだから、全く身体的変化を生じない知覚というものはそもそも存在しない。したがってすべての対象知覚には身体の変化とその知覚が後続するとも主張しているのである。

ジェームズの情動理論が公にされたのは、1884年に彼が「Mind」誌に書いた「What is an emotion?」という論文である (James, 1884)。この論文の一部は「概論」にそのまま使われているが、Mind誌の論文には、「身体変化の感覚なしに情動は生じない」という彼の主張の根拠として「無感覚」の人々のいくつかの具体的な症例が引用されている。「哲学者ジェームズ」ではなく、生理学の教員から心理学の教員へと変わりつつある時代のジェームズの主張であるだけに、心理学者にとってはこのほうが読みやすいところもある。この論文の要旨をごく簡単にまとめれば、情動反応は特定の鍵刺激によって解発される自動的な身体反応であり、その反応の知覚が情動の体験であるということである。従って、自動的な身体反応があっても感覚に欠ければ情動体験は現れない。この論文で引用されている症例は「無感覚」の人々の感情世界が貧困であるということを示すものであるから、ジェームズは彼の心理学の教科書の中でもそのような論理を展開してもよかったように思われる。

しかし「心理学原論」を書き上げて哲学者になったジェームズにとっては、個々の症例を根拠にして論を進めるという発想がもはやなかったのかもしれない。また、「Mind」誌の論文にしても、身体運動を伴う情動（ここでは standard な情動という語が使われている）が考察の対象であるから、彼の主張は「身体運動を伴う情動については身体運動の感覚が情動である」というなんとも奇妙な主張であると言うこともできるだろう。しかし「泣くから悲しいのである」という主張が今日においても一定の説得力を持っているとすれば、ジェームズの情動理論がもつパワーの「根拠」は生理的事実や論理性にではなく、もっと別のところに求められるべきものかもしれない。

結論

ジェームズがどのような根拠をもって「一つの心的状態が直接他の心的状態から喚起せられることはない」と述べたのかについては不明であった。ただ、心的状態（意識）がつねに「何ものかについて」の心的状態であるかぎり、意識の対象を変更する機能は意識自体にはないと言えるかもしれない。

意識の対象を変更しうるものは意識の外側からやってくる刺激（incoming current）であり、その刺激の強力なものが身体の変化である。従ってこの身体の変化は強い意識状態（情動体験）を生じることになる。身体の変化がない場合には、意識を変えうる刺激は対象の知覚それ自体のみであるから、その体験の強さは非常に弱いか、あるいはもはや情動とは言えず、認知的判断にとどまる。しかしどのような対象の知覚も身体全体に影響を及ぼすのであるから、現実には情動体験を完全に欠く知覚対象など、存在しないと言ってもよいかもしれない。

身体の活動変化それ自体で情動体験が生み出されるかどうかという問題について、ジェームズは、内臓変化は意志的に制御することができないから、真性の情動にはならないかもしれないと述べる一方で、どのような情動体験も多様な身体の変化に対応して生じるのであるから、「真性でない」情動体験はありえず、従って身体を意志的に操作することで情動は必ず「生み出さ

れる」とも言う。

エクマンをはじめ、末梢起源説をとる心理学者が主張する「身体操作による情動（あるいは感情状態）の喚起」は、喚起された情動が真の情動といえるかどうかについて批判をすることが可能であろうが、ジェームズの立場に立てば身体操作によって作られた情動が真の情動であるかどうかは問題にはならない。強いて言えば「強い情動」にはならないであろうという予測だけが可能であろう。

ジェームズの情動に関する考え方はかならずしも無矛盾ではない。むしろ矛盾に満ちているというほうが適切であろう。本稿では随意的制御によるものを含む身体変化によって生じる情動について、ジェームズの見解が揺れ動いていたと見えることを指摘した（注6を参照）。情動の理論にはエネルギー論という視点がある。ジェームズの認識はこの点についても揺れ動いているのだが、これについては、また別稿で述べたいと思う。

今田（1956）はその解説の中で、バートランド・ラッセルとG・W・オルポートを引用しながらこのジェームズ思想の矛盾に言及している（p.398-399）。しかし、この矛盾こそがジェームズの著作を読む時のなにか「わくわくする感じ」の源泉であるのかもしれない。

おわりに

19世紀末から20世紀初頭にかけて生理学の進歩が著しかったはずの時代に、キャノンによるジェームズの批判が、1884年の最初の主張から実に43年を経て行われたことを考慮すると、少なくない数の心理学の教科書が「ジェームズの末梢起源説に対し、キャノンは中枢起源説を主張して批判を加えた」と、あたかも同時代的に生じた出来事であったかのように記述していることには、多少の違和感を禁じ得ない。

本稿においては、多くの心理学の教科書がこのスタイルの記述をしていることを指摘するとともに、キャノンによる批判には批判の根拠が示されるのに、ジェームズの主張にはその根拠が示されないことを指摘した。

主張の根拠を調べるためにジェームズの著作を読むと、その主張には一定の根拠は示されているものの、その論理はややあいまいで、あきらかに矛盾を含んでいる記述があることがわかった。多くの教科書がジェームズの主張についてその根拠を明示しないのは、端的に言って、その根拠が薄弱で教科書には記述しにくいからであろう。しかし43年ののちに多くの実証的データをもってキャノンがジェームズの批判をしたこと自体が、ジェームズの主張が持っていたインパクトの強さを示していると考えてよいであろう。

なお、本文部分を書き終えたあとで、岩下（1998）が参照している澤田（1978）の記述を読む機会があった。これには「ジェームズのテーゼでは、身体的表示がまず最初に入りこんでこなければならぬと考えられるから」という根拠が（やや簡略に過ぎるきらいはあるが）述べられていること、デューイによる批判がジェームズの主張の発表直後にあらわれたこと、またワトソンによる批判があったことなど（もちろんキャノンによる批判も）述べられている。本稿では内外の教科書を検索するという点においては、網羅的な努力からはほど遠い水準で終わっている。しかし今回の検索結果によっても、ジェームズの主張の取り扱い方には時代にかかわらずかなりの変動があること、またジェームズの主張の根拠については記述しない「二点セット」が主流であることがわかった。

注1 今田恵の岩波文庫版の前書きによれば、原著は1891年に出版されたとあるが、筆者の手元にあるDover Books 版の記述を始め、多くの文献リストでは、Psychology; The briefer course の出版は1892年とされている。今田恵の伝記「ウィリアム・ジェームズ」（昭和24年、養徳社）や「ジェームズ論文集」（世界大思想全集 哲学・文芸思想編15 昭和31年 河出書房）でも1892年となっている。伝記「ウィリアム・ジェームズ」の113ページには「1891年の夏、此（The principles of psychology）を教科書に適するように（中略）「心理学要論」となし、その秋出版した。」という記述がある。奥付の発行日と実際の発行日とが食い違っているということであるかもしれない。

- 注2 Dover 版の [the briefer course] の扉には、「本書は1961年出版のものの復刻であるが、1961年版はすでに原著の省略版である」とかかかれている。章立てを今田恵の岩波文庫版と比較すると、第1章から第9章までが省略されていることがわかる。このため、岩波文庫版で第24章である「情緒」の章はDover版では第15章になっている。Dover版で第1章から第9章までが割愛された理由は、これらの章の全部が生理学あるいは脳の構造の解説にあてられているため、復刻の時点（1961年）ではその記述に学術的価値が少ないとして割愛されたものと思われる。なお、「The briefer course」については1992年に岩波文庫から今田寛の新訳が出ているが、本稿では執筆者が読み慣れた旧訳を参照した。
- 注3 ハエトリタケ：テングタケ、ベニテングタケ。煮汁を用いてハエの殺虫剤とすることからハエトリタケの別称がある。アセチルコリン作動の受容体に作用するムスカリンを含有する。
- 注4 W.B. Cannonの名前は一カ所出てくるが、それはヴードゥーのタブーについて述べられた論文であって、これがジェームズを批判したキャノンと同一人物かどうかは不明)
- 注5 岩下は1925年から1993年に出版された教科書6点を挙げている
- 注6 本稿の直接の目的からは外れるが、この直後のジェームズの主張は、もう少し後でジェームズが主張することと矛盾しているようである。つまり「我々は随意筋の操作はできても不随意筋の操作はできない。ちょうどくしゃみのまねがどこかうソ臭いように、悲しみや情熱をつくりだす原因がないのにそれを模倣するとひどく『うつろ』でうわべだけのものになりがちなのだ。(p.245-246)」という主張は、p.249以降に書かれている "any voluntary and cold-blooded arousal of the so-called manifestations of a special emotion should give us the emotion itself." という記述と整合性があるとは考えにくい。「ジェームズの情動末梢起源説は正当であり、随意筋の操作で感情状態を作り出すことができる」というジェームズの後継者たちの主張に対して、「しかしジェームズは、そのような情動はうわべだけのものだとも言っている」と反論することもできそうである。

参考・引用文献

- Atkinson, R.L., Atkinson, R.C., Smith, E.E., Bem, D.J., and Nolen-Hoeksema, S. 1996
Hilgard's Introduction to Psychology (12th Edition) Harcourt Brace College
Publishers.
- コーネリアス, R.R. 1999 「感情の科学—心理学は感情をどこまで理解できたか—」
齊藤・堀内 (訳) 誠心書房 (原著出版は1996)
- 長谷川寿一・東條正城・大島尚・丹野義彦 2000 はじめて出会う心理学 有斐閣
- 春木豊 1966 「感情と情緒」本明寛 (編) 心理学序説改訂版 (第9章) 金子書房
- 今田恵 1949 「ウィリアム・ジェームズ」養徳社
- 今田恵 1956 「ジェームズ論文集」(世界大思想全集 哲学・文芸思想編 15) 河出書房
- 今田恵 1958 現代の心理学 (岩波全書) 岩波書店
- 今村護郎 1968 「情緒」八木冕 (編) 心理学II (第6章4節情緒) 培風館
- 岩下豊彦 1998 心理学 双々庵
- Izard, C.E. 1997 Emotions and facial expressions: A perspective from differential emo-
tions theory. In "The psychology of facial expression" Russell, J.A. and Fernández-
Dols, J.M. (Eds.) Cambridge University Press, Cambridge, U.K.
- James, W. 1884 What is an Emotion? Mind, 9, 188-205.
- James, W. 1890 The principles of psychology. Dover publishing Inc., Mineola, NY.
(1890年に Henry Holt and company から出版された原著の1950年復刻版)
- James, W. 1892 Psychology; The briefer course. Dover Publication Inc., Mineola, NY.
(1892年に Henry Holt and Company から出版された原著を1961年に短縮版とし
て Harper & Row, Publishers から出版されたものの復刻版)
- ウィリアム・ジェームズ 1939 「心理学 (上・下)」今田恵 (訳) 岩波書店 (原著出版
は1892年)
- 鹿取廣人・杉本敏夫 (編) 1996 心理学 東京大学出版会
- Kosslyn, S.M. and Rosenberg, R.S. 2001 Psychology :the brain, the person, the world.
Allyn & Bacon, Needham, MA.
- McKeachie, W.J. and Doyle, C.L. 1966 Psychology. Addison-Wesley Publishing Co.

- ミンスキー, M. 1990 「心の社会」安西祐一朗 (訳) 産業図書 (原著は1985/1986)
- Munn, N. 1966 *Psychology* (5th Ed.) Houghton Mifflin Company, Boston.
- 中村完 1986 「喜怒哀楽の心理」名城・東江 (編著) 初めて学ぶ心理学 第4章 福
村出版
- 中村真 2000 「感情の働き」橋本憲尚 (編著) テキスト心理学 (第6章) ミネルヴァ
書房
- 澤田慶輔 1978 「感情」澤田・古畑 (編) 人間科学としての心理学 サイエンス社
- 佐藤俊彦 2005 「血圧と行動」畑山俊輝 (他編) 感情心理学パースペクティブズ：感
情の豊かな世界 北大路書房
- 鈴木直人 2001 「感情・情緒 (情動) とは何か」濱治世、鈴木直人、濱保久著 感情
心理学への招待 (梅本・大山監修 新心理学ライブラリ 17) サイエンス社
- 高橋穰 1921 心理学 岩波書店
- Trotter, R.J. and McConnell, J.V. 1978 *Psychology: The human science*. Holt, Rinehart
and Einston.
- 谷田部達郎 1950 心理学序説 創元社